士言堂 旗揚げ公演 異聞奇譚其ノ壱

『満月に躍る』

脚本 塩澤 剛史

◇主な登場人物

鈴ヶ森　清彦（すずがもり　きよひこ）
長谷川　夏子（はせがわ　なつこ）
万里小路　元徳（までのこうじ　もとのり）
万里小路　幸枝（までのこうじ　ゆきえ）
瓜生（うりゅう）
名田　嘉代子（みょうでん　かよこ）
百日紅（さるすべり）
鈴木　うめ（すずき　うめ）
荒尾　有良（あらお　ありかず）
鹿園　喜重郎（しかぞの　きじゅうろう）
山田　きん（やまだ　きん）
栗林　辰雄（くりばやし　たつお）
寺内　ハナ（てらうち　はな）
本田　熊八（ほんだ　くまはち）

プロローグ

幻想的な曲が聞こえてくる。明かりが入ると鈴ヶ森が手に鉄瓶をもっている。

鈴ヶ森「鉄瓶・・・さぁ。お前の声を聴かせておくれ」

暗転。OP

一場

舞台前側にエリア明かりが入ると元徳、瓜生、嘉代子、熊八が板付き。場所は万里小路元徳の書斎。

瓜生「嘉代子。例の方は見つかったのですか？」

嘉代子「はい。しかし・・・」

瓜生「どうしました？」

嘉代子「その、とても瓜生様が仰るような人間には見えないのですが・・・」

瓜生「確かめてみればよいことです」

嘉代子「はい」

元徳「本当に大丈夫なんだろうな。瓜生」

瓜生「はい元徳様。私共にお任せいただけましたらきっと幸枝様のお命をお守りしてみせます」

元徳「今度の婚約には我が万里小路家の命運がかかっているんだ。失敗は許されん」

瓜生「心得ております。この瓜生にお任せください」

元徳「わかっている。今までもお前の占いの通りにやってきて間違いはなかったのだからな」

瓜生「はい」

元徳「熊八、これを」

元徳が懐から遺書を熊八に渡す。

熊八「これは・・・」

元徳「万が一のためだ」

熊八「（遺書を読み始める）この遺書が読まれているということは私はすでに・・・」

元徳「おい！なにやってんだよ」

熊八「確認をと思いまして」

元徳「今、読むなよ」

熊八「はぁ」

元徳「どうして3人ともピンときてないんだよ！私が死んだ後に読まれるつもりで書いてあるんだから、今、目の前でよまれたら恥ずかしいだろ」
3人「はぁ」
元徳「え？馬鹿なの？とにかく、それは私に何かあった時ようだから」
嘉代子「私がお預かりしましょう」
熊八「（嘉代子に遺言を渡す）あの、幸枝様は今回の御婚約にご納得いただけましたのでしょうか？」
元徳「娘の了承などいらん！私の言うことにしたがっていればよい！」
熊八「わかりました」
嘉代子「旦那様、そろそろお時間です。応接室の方に」
元徳「うむ」
熊八「では私は外の警備を」

熊八が上手前に退場。

元徳「私は万里小路家を守らなければならんのだ！」

木製の大きな扉が開く音。全体に明かりが入ると、幸枝、うめ、辰雄、ハナ、荒尾、きん、喜重郎が板付き。その真ん中を元徳、瓜生、嘉代子が奥まで歩いていく。

元徳「皆さま、お揃いかな？」
嘉代子「鈴ヶ森様がまだです」
幸枝「お父様、この方たちは？」
元徳「これから説明をする」
幸枝「はい」
元徳「荒尾君までご足労頂いてすまないね」
荒尾「いえ、私もこの万里小路家の一員となるので当然のことです」
元徳「よろしく頼むよ」
荒尾「はい」

木製の扉が開く音。鈴ヶ森と夏子が上手前から登場。鈴ヶ森が何食わぬ顔で参加する。

夏子「ちょっと、清ちゃん！ははは・・・遅れてすみません」
嘉代子「鈴ヶ森です」
鈴ヶ森「鈴ヶ森です」
喜重郎「鈴ヶ森・・・」

夏子「清ちゃんもちゃんと謝って」
嘉代子「これで全員そろいました」
元徳「うむ。私がこの万里小路家の当主、国会議員の万里小路元徳です」
幸枝「娘の幸枝と申します」
元徳「荒尾君」
荒尾「はい。陸軍少尉、荒尾有良です」
夏子「軍人さん」
元徳「彼は幸枝の婚約者だ」
幸枝「お父様、そのことですが私はまだお受けいたしてません」
元徳「これは決まったことなんだ」
幸枝「でも、私にも選ぶ権利があります」
荒尾「私、そんなにダメですか？」
幸枝「今言った権利というのは好みのことではくて私には私の人生があるということで、生きる意味をですね・・・」
元徳「ふん！生きるのに意味など必要ない！お前は私の言うことに従っていればいいんだ！」
うめ「あ、あの！このお屋敷の使用人の鈴木うめです。主に幸枝様のお世話をさせて頂いております」
ハナ「私は万里小路さんが芸術家の為に作ってくれたサロンに住まわせてもらっている詩人の寺内ハナです」
夏子「詩人さん」
辰雄「同じくサロンに住んでいる画家の栗林辰雄です」
夏子「画家さん」
瓜生「万里小路家に代々使える占い師の瓜生です」
嘉代子「瓜生様の弟子の名田嘉代子です。今回の件を指揮を取らせて頂きますのでよろしくお願いします。では山田さん」
きん「巫女の山田きんと申します。高額なお給金が頂けると聞いて神社復興の為にやってまいりました。よろしくお願いいたします」
嘉代子「自己紹介を」
喜重郎「自己紹介だぁ？おいおい。俺は遊びに来たわけじゃないんだ」
嘉代子「お帰りはあちらになります」
喜重郎「祓い屋の鹿園喜重郎だ」
夏子「祓い屋！あ！怪奇屋の助手をしています、長谷川夏子です。あ、清ちゃんとは幼馴染です」
鈴ヶ森「怪奇なことをなんでも解決する怪奇屋の店主、鈴ヶ森清彦と申します」
夏子「まぁぼほ只の便利屋なんですけどね」
鈴ヶ森「余計なことを言うな夏子」
ハナ「あの、これは何が始まるんですか？」

嘉代子「ご説明します。あれを」
うめ「こちらです（白羽の矢を嘉代子に渡す」）
きん「白羽の矢」
嘉代子「これが昨日、見つかりました」
喜重郎「みつけたのは？」
うめ「私です。外の掃除をしようとしたら玄関に刺さっているのをみつけました」
荒尾「それがどうしたんですか？」
瓜生「長野県に伝わるの光前寺の早太郎の話をご存知ですか？」
荒尾「いえ」
瓜生「猿の妖、狒々が若い娘を人身御供として差し出させるためにつけた印がこの白羽の矢です」
荒尾「ちょっと待ってください。妖？」
嘉代子「はい。いわゆる妖怪です」
荒尾「ばかばかしい！この近代化の進んだ大正９年のご時世に妖怪だなんて」
喜重郎「いるんだよな。こういう自分の知ってることしか信じないやつ」
荒尾「なんだと！」
喜重郎「やんのか？軍人だかなんだかしんねぇーけど痛い目みるぞ」
嘉代子「百日紅！」

術のかかる音。百日紅が登場。荒尾、辰雄、うめ、幸枝、夏子が驚く。

荒尾「急に現れた！なんだこいつは！」
嘉代子「私の式神の百日紅です」
百日紅「百日紅です」
鈴ヶ森「式神！」
夏子「清ちゃん」
荒尾「式神？」
鈴ヶ森「式神を知らないんですか？あの人の呪術の力を愛用の道具などを依り代にして人型にしたものですよ」
荒尾「そ、そうなんだ」
鈴ヶ森「本物を初めてみた！依り代はなんですか？」
夏子「すみません。清ちゃん、後にしよ。今、説明してくれてるから」
鈴ヶ森「ちぇ」
嘉代子「これで信じて頂けましたか？」
喜重郎「（矢を手に取り臭いをかぐ）確かに妖の臭いがするな」
きん「ということは猿の妖、狒々に幸枝さんは狙われていると」
嘉代子「恐らくは」
瓜生「皆さんをお呼びしたのは妖から幸枝様を守って頂きたいのです」

喜重郎「なるほど」
ハナ「あの！すみません！話に全然ついていけてないんですが・・・」
辰雄「私もです」
嘉代子「どのあたりから？」
ハナ「白羽の矢のあたりです」
辰雄「私も」
嘉代子「随分序盤ですね」
ハナ「すみません。それで、私たちはどうしてよばれたんですか？」
元徳「この万里小路家に暮らしている人には知っておいてもらおうと思ってね」
ハナ「何もできませんが」
辰雄「私も」
嘉代子「（遺書を出して）この遺書が・・・」
元徳「ちょいちょいちょい。え？どうして今、読もうとしたの？」
嘉代子「ここかなと思って」
元徳「絶対に今じゃないよね」
嘉代子「はぁ」
元徳「どうしてピンとこないんだよ。わかったよ。読む時になったら私が言うから」
嘉代子「いいんですか？」
元徳「あぁそうか。読む時は私が死んだ後だ」
幸枝「ええ！お父様、死んでしまわれるのですか？」
元徳「いや、死ないよ。これも万が一の為に書いただけだから」
嘉代子「この・・・」
元徳「だから今じゃないって！」
嘉代子「はぁ」
元徳「もう！」
きん「あの～お給金は？」
元徳「あぁそうだったな。基本給のほかに幸枝を守って頂けたらプラスでお支払いしましょう」
きん「私、やります！」
喜重郎「あんた何か心当たりはあるのかい？」
元徳「ふん！私も国会議員の今の地位を築くのに色々としてきたらかな、敵がいないというわけではない」
喜重郎「あんたが原因で娘の命が狙われるってことか・・・いいぜ。面白そうだ。俺もやるぜ」

瓜生がせき込む。

嘉代子「大丈夫ですか？」

瓜生「ええ。少し疲れました」
嘉代子「しばし休憩にいたします。瓜生様、お部屋に」
瓜生「ええ」

瓜生と嘉代子が上手前に退場。

元徳「私も仕事があるので失礼するよ」

元徳が上手前に退場。鈴ヶ森が百日紅を見に行く。

幸枝「私はどうすれば・・・」
うめ「お嬢様・・・」
荒尾「私が守ってさしあげます」
幸枝「はぁ」
荒尾「あ、なんでしょ。そのふわっとした感じは」
喜重郎「さて、あんた達はこの屋敷から離れた方がいいな」
ハナ「自慢じゃないですが、ここの他に行くあてもお金もありません」
辰雄「私もです！」
喜重郎「構わないが危険だぞ」
ハナ「それもまた芸術！すべてが私の詩の一部となるでしょう！」
辰雄「私もです！」
喜重郎「あ、そう」
荒尾「私も幸枝さんをお守りしないと」
幸枝「はぁ」
荒尾「なんでしょう。その感じ！」
百日紅「あの、なんでしょうか？」
鈴ヶ森「式神なんて珍しいからさ。さっきの人についていかなくていいの？」
百日紅「命令がなければ」
鈴ヶ森「そうなんだ。で、依り代はなんなの？」
夏子「ちょっと清ちゃん」
鈴ヶ森「なんだよ。今、忙しいの」
夏子「依頼はどうするの？」
鈴ヶ森「うーん。その人はには悪いけど、僕はいいや」
夏子「どうしてよ。助けてあげないの？」
鈴ヶ森「だって、さっきいた女の人とかそこの祓い屋のお兄さんとかいるし大丈夫だろ」
きん「あの、私は？」
鈴ヶ森「あぁ。巫女さんね」
きん「私もお払いできます！」

喜重郎「あんた、あの鈴ヶ森だろ？」
鈴ヶ森「どの？」
喜重郎「呪われてるって噂のだよ」

一同驚く。

鈴ヶ森「あ、内緒でお願いできますか？」
喜重郎「もう無理だよ」
きん「あなた呪われているんですか？」
鈴ヶ森「ええ。まぁ」
きん「軽いっ！」
鈴ヶ森「僕のご先祖が自分の地位の為に妖と契約を交わしたらしいんですよ」
喜重郎「契約？」
鈴ヶ森「はい。その人の地位と引き換えに子孫の命を渡すという契約です」
きん「そんな！」
鈴ヶ森「で、それが呪いとなって今も残ってるって感じです」
夏子「清ちゃんはその呪いを解く方法を探しているんです」
喜重郎「それで、怪奇屋か」
夏子「はい。そういった妖の情報が入ってこないかと・・・」
きん「あなたはお手伝いを？」
夏子「清ちゃんとは家が近くて幼馴染なので・・・」
喜重郎「あんた、（ちょっと泣いてる）健気だな・・・」
夏子「いえ・・・」
喜重郎「だったらこの依頼は受けたほうがいいんじゃねぇか」
鈴ヶ森「どういうことです？き、き、金太郎さん」
喜重郎「喜重郎だ。いや、さっきの瓜生とかいうやつはこの界隈では有名な占い師だからな」
鈴ヶ森「そうなんですか！」
喜重郎「あぁ。ひょっとしたらお前の知りたいことも知っているかもな」
夏子「清ちゃん」
鈴ヶ森「うん！無理だ。あきらめよう」
夏子「どうしてそうなるのよ」
鈴ヶ森「金太郎さん」
喜重郎「喜重郎だって言ってんだろ！きしかあってねぇーじゃねぇか！」
鈴ヶ森「今回の件は確実に妖がからんでいるんですよね？」
喜重郎「お嬢様には残酷だが間違いないぜ。しかも、とびきりヤバイやつだ」
鈴ヶ森「臭いを嗅いだだけでそこまでわかるんですか？」
喜重郎「祓い屋の勘ってやつかな」

鈴ヶ森「なんだあてずっぽうか～」
喜重郎「館だっていってんだろ！」
鈴ヶ森「そんなやばい妖を相手にするのは無理だよ」
夏子「そうだけど・・・みんなで協力すればいいのよ！ね！桃太郎さん！」
喜重郎「喜重郎だ！きすらあってねぇじゃねぇか！俺は協力なんてごめんだね」
夏子「どうしてよ」
喜重郎「お嬢さんを守ったやつに特別報酬がでるんだ。早い者勝ちだろ」
きん「私もお金が欲しいので」
鈴ヶ森「僕の呪いに関する情報があるかどうかわからないのに命はかけられないよ」
夏子「わかったわよ」
百日紅「知っているかもしれませんよ」
夏子「百日紅さんだっけ？何をかな？」
百日紅「その人の呪いを解く方法」
夏子「そうなの！」
百日紅「瓜生様は呪詛事にも長けているお方なので」
夏子「ほらー！」
鈴ヶ森「ほらーじゃないの。それにお嬢様を狙っている妖に殺されたら元も子もないだろ」
夏子「そうだけど・・・」
鈴ヶ森「ということなのですみません」
幸枝「いえ・・・」
ハナ「あの～よくわからないのですが、それって私達が狙われるってこともあるんですか？その妖？に」
きん「早太郎のお話ですと人身御供は若い女性となっていますが・・・」
ハナ「え・・・私、あてはまってますよね？」
うめ「では、私も？」
辰雄「よかった～」
ハナ「よくない！」
辰雄「よくないです！」
喜重郎「早太郎の話の通りならな。まぁ妖の考えることだ人間に理解なんてできねぇよ」
辰雄「え？え？じゃー私が狙われる可能性もあるんですか？」
喜重郎「そいつに聞いてみりゃいいんじゃねぇか。なぁ。式神」
辰雄「ど、どうなんですか？」
百日紅「どうでしょう？私には人間の方が理解できませぬが」
辰雄「中々、哲学的な式神さんだ」
ハナ「わた、私、まだ死にたくないのですが、その妖とやらはいつくるのですか？」
喜重郎「それを聞いてなかったな」
百日紅「嘉代子様にお聞きください」

辰雄「我々も守って頂けるのですよね？」
喜重郎「どうだろうな？俺たちが受けた依頼はお嬢様を守るだからな」
ハナ「いや～守って～。ハナもまもって～。まだ死にたくない～」
辰雄「辰雄も～」
喜重郎「離せよ！鬱陶しい！」
鈴ヶ森「じゃー僕達はこれで」
ハナ「見捨てないでぇ～。守って～」
辰雄「守って～」
鈴ヶ森「僕は依頼は受けませんから・・・」
ハナ「あなたの為に詩を読むから～」
鈴ヶ森「いらないですよ」
辰雄「絵を描くから～」
鈴ヶ森「いらないですって」
ハナ「私達を守ってくれるあなたは、まるで森でみつけた毒キノコのよう・・・」
鈴ヶ森「馬鹿にしてますよね？」
夏子「（涙ぐむ）心に響きました」
鈴ヶ森「どの部分が？本当に詩人なんですか？」
ハナ「はい～だから守って～」
荒尾「静かにしてください！今、一番に心を痛めておられるのは幸枝さんなんですよ」
幸枝「私は大丈夫ですので」
荒尾「健気だ・・・」
幸枝「あ、こっち見ないでください」
荒尾「辛辣なところも素敵だ」

扉が開く音。上手から嘉代子が登場。

嘉代子「お待たせしました」
鈴ヶ森「あの僕はこれで・・・」
嘉代子「お話は式神を通して聞いていました」
鈴ヶ森「便利なんですね」
嘉代子「鈴ヶ森さん。瓜生様ならあなたにかけられた妖の呪いを解く方法がわかるかもしれませんよ」
鈴ヶ森「ほんと・・・」
夏子「本当ですかっ！」
嘉代子「ええ。ただし、皆さんにも力を見せて頂き、その上で依頼をお願いをするか判断させて頂きます」
喜重郎「おいおい、俺たちを試そうってのかい？」
嘉代子「はい」

喜重郎「大道芸人じゃないんだ。術を披露するなんてごめんだな」
嘉代子「お帰りは・・・」
喜重郎「俺は法力を使う」
夏子「素直に言えばいいのに」
喜重郎「あぁ」
夏子「ごめんなさい」
荒尾「その法力とは？」
喜重郎「仏の力を借りて邪悪なものを滅する力のことだ」
荒尾「あ～はいはい。あれね」
喜重郎「例えば・・・」

百日紅に九字の印を切って

喜重郎「喝！」

百日紅が苦しみだす。

喜重郎「ほれほれ～」
嘉代子「もういい！」

術を解く。

喜重郎「もちろん、合格だよな？」
嘉代子「ええ。あなたは？」
きん「私は巫女ですので氏神様のお力をお借りして妖を祓うことができます。こんな風に・・・（百日紅に）きえーーーーー！」

百日紅は微動だにしない。

きん「あ、あれ？きえー！」

百日紅が首を傾げている。

きん「きえっ！きえっ！」
嘉代子「わかりました。もういいです」
きん「合格ですよね」
鈴ヶ森「なんでそうなるんだよ」
嘉代子「合格です」

きん「ありがとうございます！」
鈴ヶ森「いいのかよ！」
嘉代子「では鈴ヶ森さん」
夏子「がんばって！」
鈴ヶ森「僕は、物の声を聞くことができます」
嘉代子「物の声を？」
鈴ヶ森「はい。長い年月の経ったものや、愛着のある物でしたら」
嘉代子「ツクモガミですか」
鈴ヶ森「そんなようなものです」
喜重郎「なんだよその力！妖術に近いじゃねぇーか」
嘉代子「恐らく呪いと関係があるのでは？」
鈴ヶ森「はい。一族の誰にいつ、呪いが発動するのかはわからないのですが、呪いが発動した証として特別な力を授かるようなんです」
喜重郎「なるほどな」
鈴ヶ森「すみません、その筆をお借りできませんか？」
辰雄「これですか？」
鈴ヶ森「はい」
辰雄「・・・どうぞ」
鈴ヶ森「ありがとうございます」

鈴ヶ森が筆を受け取る。

鈴ヶ森「筆よ・・・さぁ。お前の声を聞かせておくれ」

術がかかるSEがはいり照明がかわる。一同驚き照明が戻る。

辰雄「ど、どうですか？」
鈴ヶ森「何も聞こえませんでした。これ、新しいですか？」
辰雄「はい。昨日おろしました」
鈴ヶ森「長い年月が経ってるか愛用している物っていいましたよね？」
辰雄「すみません」
喜重郎「見事な逆切れだな」
鈴ヶ森「幸枝さん。そのイヤリングをお借りしても？」
幸枝「ええ」

うめが取って鈴ヶ森に渡す。

鈴ヶ森「ありがとうございます。イヤリングよ・・・さぁ。お前の声を聞かせておくれ」

術がかかるSEがはいり照明がかわる。一同驚き照明が戻る。

鈴ヶ森「なるほど。幸枝さん」
幸枝「はい・・・」
鈴ヶ森「あなた、あの人と結婚するのが本当にいやなんですね」
幸枝「あたりました」
荒尾「あたりましたじゃないですよ！」
嘉代子「お静かに」
荒尾「私ですか！」
嘉代子「鈴ヶ森さんも合格です」
鈴ヶ森「よし！」
夏子「やったね！清ちゃん」

ノックの音。続いて扉が開く音。上手から熊八が登場。

熊八「失礼いたします。このお屋敷の雑務を担当しております、本田熊八です」
嘉代子「妖が幸枝様をさらいにくるのは恐らく満月の今夜」
喜重郎「おいおい！全然時間がねぇーじゃねぇーか」
熊八「必要なものがあればこの熊八にお申し付けください」
嘉代子「皆さまには日の沈む１８時までこちらの応接室で待機していただきます」
喜重郎「屋敷の中をみてまわってもいいだろ？」
嘉代子「それはご自由に」
鈴ヶ森「あの、ご飯ありますか？」
夏子「もう！恥ずかしいよ～」
熊八「ご用意いたします」

暗転。

２場

ブルー転換のち、前のエリア明かり。百日紅とハナが板付き。百日紅が印を結んでいる。

ハナ「私ね人生ってあっという間だと思うの。だから自分の生きた証っていうの？それを詩で残したいのよ」
百日紅「えい！」

術がかかる音。

ハナ「それは何をしているの？」
百日紅「嘉代子様のご命令でお屋敷の中に結界をはっています」
ハナ「そ、そうなんだ。あなたも大変ね」
百日紅「これが私の仕事ですから」

百日紅が下手前に退場。

ハナ「あ、まってよ！」

上手から鈴ヶ森と夏子が登場。。

夏子「広いお屋敷だねぇ」
鈴ヶ森「うん」
夏子「何かみつかったの？」
鈴ヶ森「特には」
夏子「本当に猿の妖がさらいにくるのかな？」
鈴ヶ森「どうだろうな」
夏子「何か気が付いたの？」
鈴ヶ森「別に」
夏子「甘いな」
鈴ヶ森「何が？」
夏子「清ちゃんは、嘘をつく時に顎を触る癖があるんだよ」
鈴ヶ森「嘘！」
夏子「嘘！」
鈴ヶ森「嘘かーい！」
夏子「でも、今のでばれたわね！さぁ！正直に話しなさい」
鈴ヶ森「わかったよ。あの矢なんだけどな・・・」
夏子「うんうん！」

照明切り替え。応接室。幸枝とうめときんが板付き。

幸枝「あの、あなたは他の方みたいに屋敷の中を見に行ったりしないの？」
きん「はい。幸枝様に何かあったらほうしゅ・・・大変ですから」
幸枝「様は止めてください。それに、恐らく何もないと思いますので」
きん「なにかご存じなんですか？」
幸枝「いえ・・・」
きん「・・・幸枝さんはあの軍人さんとの結婚はどうしていやなのですか？」
幸枝「私は自分の人生は自分で決めたいだけです」

きん「でも、あの方はエリートでしょうし。お父様もあなたのことを思って・・・」
幸枝「お父様は私のことなど考えていません」
きん「そうなんですか？」
幸枝「私の人生はこの家の為にあるのではありません！」
うめ「お嬢様」
きん「すみません」
幸枝「取り乱しました」
きん「あ～じゃー私も少し屋敷をみてきまーす」

きんが上手に退場。

うめ「お嬢様」
幸枝「うめ～どうしよう」
うめ「困りました・・・」
幸枝「あの矢がこんな大事になるなんて」
うめ「私も驚きがかくせません」
幸枝「あれは普通の矢なんだよね？」
うめ「はい。私が買ってきて玄関に刺しましたらから」
幸枝「じゃーどうしてあの喜重郎とかいう人は『妖の臭いがする！』とか言っていたの？」
うめ「あ！あの人、嘘をついたのでは？」
幸枝「嘘？」
うめ「はい。引っ込みがつかなくなったのではないかと」
幸枝「喜重郎さんにも申し訳ないことしちゃったわね」
うめ「はい」
幸枝「変な噂が立てば婚約の話もなくなると思ったのに・・・」
うめ「それどころか長野の民話まで出てきて話がどんどんと大きくなっています」
幸枝「喜重郎さんに謝った方がいいかな？」
うめ「そうですね」
幸枝「そういえば、荒尾さんは？」
うめ「少し散歩してくると」
幸枝「そう。結婚・・・あきらめてくれないかなぁ」

ブルー転換。前明かり。鈴ヶ森と夏子が板付き。

鈴ヶ森「というわけだ」
夏子「すごーい！どうしてわかったの？」
鈴ヶ森「さっきイヤリングの声を聞いただろ」

夏子「そっか！イヤリングが教えてくれたんだ」
鈴ヶ森「そういうこと。わかったら今日のところは夏子は帰れ」
夏子「どうしてよ！」
鈴ヶ森「後は僕一人でやるから」
夏子「私も残るわよ！助手なんだから」
鈴ヶ森「いても役にたたないだろ？」
夏子「そんなことないもん！」
鈴ヶ森「危ないことがあっても助けてやらねぇーぞ」
夏子「こう見えて私だって強いんだから！」
鈴ヶ森「あのな、妖相手に素手でどうやって戦うんだよ」
夏子「うーーー！兎に角！何を言われてもぜーーーたっいについていくからね！」
鈴ヶ森「邪魔なんだけど」
夏子「邪魔じゃない！」
鈴ヶ森「今回はかなり危険かもしれないんだよ」
夏子「でも、白羽の矢は偽物なんでしょ？」
鈴ヶ森「いやな予感がするんだ」

辰雄が上手から登場。

辰雄「あの～鈴ヶ森さん・・・」
鈴ヶ森「えーと」
夏子「画家の栗林さんよ。どうしたんですか？」
辰雄「いえ、こういうの初めてなんだか落ち着かなくて・・・」
夏子「そうですよね」
辰雄「ええ。急に妖とか言われても・・・ね」
夏子「わかります。私もそうでしたから」
辰雄「そうなんですか！」
夏子「はい。子供の頃に清ちゃんの物の声を聞く能力を見ていなかったら私も妖とか怪奇事とか絶対に信じていなかったですよ」
辰雄「子供の頃からそんな能力が・・・あれ？それは呪いですか？」
夏子「え？」
辰雄「ほら、呪いが発動した証だって」
鈴ヶ森「そこ、踏まない方がいいですよ」
辰雄「え？」
鈴ヶ森「術がかかっています」
辰雄「(飛びのいて)術？！」
鈴ヶ森「そこも、そこも、そこも」
辰雄「どこを踏めばいいんですか！」

鈴ヶ森「そこもです」
辰雄「し、失礼します！」

辰雄、下手前に退場。

鈴ヶ森「みんな何かを隠している・・・」
夏子「え？」
鈴ヶ森「夏子、あまり余計な事を話すなよ」
夏子「ごめん」
鈴ヶ森「さて、この結界は何に使うのか・・・」
夏子「本当にあったんだ結界」
鈴ヶ森「屋敷の中に張り巡らされてるみたいだ」
夏子「妖が入れないようにとか？」
鈴ヶ森「どうだろうな」

鈴ヶ森が上手奥に退場。

夏子「清ちゃん！」

夏子が上手奥に退場。明かりが変わると荒尾が板付き。喜重郎が下手後ろから登場。

荒尾「誰にもつけられていないか？」
喜重郎「そんなにへぼじゃねぇよ」
荒尾「それで？」
喜重郎「あの矢の話は嘘だな」
荒尾「嘘？」
喜重郎「あの白羽の矢からはなんの妖力も感じなかった。大方あんたの婚約者あたりが企んだんじゃないのか？」
荒尾「しかし、先ほどは（真似をして）妖の臭いがするなって」
喜重郎「馬鹿にしてんのか！」
荒尾「真剣だ」
喜重郎「それはそれでムカつくな」
荒尾「（真似をして）妖の臭いがするなっていうのは？」
喜重郎「だから馬鹿にしてるんだろ！」
荒尾「私は冗談は嫌いだ」
喜重郎「本当かよ」
荒尾「どうして妖の臭いがするなんて言ったんだ？」

喜重郎「あの矢には何もないが、この屋敷からは妖の臭いがプンプンしているからな」
荒尾「そうだったのか！では、やはり・・・」
喜重郎「ま、満月が出ればわかるだろ」
荒尾「ことが起こってからでは遅いんだ。幸枝さんにもしものことがあったら・・・何か対策はできないのか？」
喜重郎「え？」
荒尾「え？」
喜重郎「お嬢さんとの結婚は作戦のうちじゃないのかよ」
荒尾「最初はな」
喜重郎「最初って、じゃー今は？」
荒尾「好きだ」
喜重郎「は？」
荒尾「目に入れても痛くないくらいには好きだ」
喜重郎「勘弁してくれよ」
荒尾「実際に目にいれて見せようとしたら気持ち悪いと拒絶されてた」
喜重郎「当たり前だろ」
荒尾「でも、好きだ」
喜重郎「(ため息をついて)おいおい。大丈夫なんだろうな？」
荒尾「作戦に支障はきたさない」
喜重郎「ならいいが」
荒尾「君もくれぐれも気をつけて。妹さんの為にも」
喜重郎「余計なお世話だよ」

妖術がかかる音。地面が震える。

荒尾「な、なんだ！」
喜重郎「こ、これは・・・口寄せ」
荒尾「口寄せ？」
喜重郎「妖を呼び寄せる術だよ！」
荒尾「なんだって！」
喜重郎「来るぞ！」

妖が登場する音。

荒尾「な、なんだこれは・・・」
喜重郎「おいおい・・・嘘だろ・・・」

ブルー転換。前のエリアに明かりが入ると百日紅、ハナ、きんが板付き。百

日紅が印を結んでいる。

きん「あれは何をやってるんですか？」
ハナ「結界だって」
きん「結界ですか」
ハナ「結界です」
百日紅「えい！」

術がかかる音。

百日紅「(きんをみつけて)え！増えている」

百日紅が上手前に退場。

ハナ「あ、移動ですね」
きん「はい」

ハナときんが上手前に退場。照明が変わると、鈴ヶ森と夏子が板付き。

夏子「立派な書斎だね」
鈴ヶ森「万里小路家は公家の出身だからな」
夏子「公家なんだ。ねぇあの巫女さんはどうして呼ばれたの？」
鈴ヶ森「わかんない」
夏子「だってなんの力もないんでしょ？」
鈴ヶ森「うん」
夏子「巫女さんだから呼ばれたのかな」
鈴ヶ森「・・・巫女だから」

袖中から声が聞こえる。

熊八「力がほしいか・・・」
鈴ヶ森「誰だ！」

熊八が上手前から登場。

鈴ヶ森「お前はっ！」
熊八「力がほしいか？」
鈴ヶ森「力？」

熊八「そうだ。圧倒的な力だ」
鈴ヶ森「あんたがくれるっていうのか？」
熊八「お前が望むのならばな」
夏子「清ちゃん！ダメだよ！」
熊八「さぁ！どうする！」
鈴ヶ森「どんな力か知らないけど、くれるっていうならもらっておくよ」
夏子「清ちゃん！」
熊八「では、力うどんをご用意いたします」
鈴ヶ森「え？」
夏子「え？」
熊八「え？先ほど、食事をと仰いませんでしたっけ？」
鈴ヶ森「あ、あぁ！いいました」
熊八「ですので、力うどんを」
鈴ヶ森「力ってお餅のことですか」
熊八「はい。他になにが？」
鈴ヶ森「その、なんか特別な力とかかな～って」
熊八「はい？」
鈴ヶ森「いえ、なんでもないです」
熊八「旦那様は間もなくおこしになられます」
鈴ヶ森「はい！」
熊八「それでは」

熊八が上手前に退場。

夏子「恥ずかしかったね」
鈴ヶ森「うん」
夏子「ぽい感じだしてたもんね」
鈴ヶ森「普通、力うどんの餅のこと力とかいわないよな」
夏子「言わない」
鈴ヶ森「圧倒的な力とかいってたし」
夏子「圧倒的なお餅ってことだよね」
鈴ヶ森「圧倒的な餅ってなんだよ！」
夏子「もち！なんだろうね」
鈴ヶ森「あ、うん」
夏子「違うの？！」

上手前から元徳が登場。

元徳「私は忙しいんだ。手短に頼むよ」
鈴ヶ森「あの本当のことを話してもらえませんか？」
元徳「本当の事？」
鈴ヶ森「はい。でないと幸枝さんを守り切れないかもしれません」
元徳「先ほど話したことが全てだが」
鈴ヶ森「話してもらえないのだったら僕達はこれで失礼します」
元徳「それは困るな」

元徳が銃を出して鈴ヶ森に向ける。

鈴ヶ森「そんなことで僕が言うことを聞くとでも？」
元徳「では、こちらではどうかな？」

銃を夏子に向ける。

鈴ヶ森「夏子！卑怯だぞ！」
元徳「悪く思わんでくれ。目的の為に手段を選んでいられないのでね」

瓜生と嘉代子が上手から登場。

瓜生「私から説明しましょう」
鈴ヶ森「うりゃーさん」
瓜生「瓜生です」
鈴ヶ森「すみません」
瓜生「鈴ヶ森さん。あなたに呪いをかけた妖の事はご存知ですか？」
鈴ヶ森「凄い妖としか」
瓜生「あなたの一族に呪いをかけた妖は大陸から渡ってきた金毛九尾の強大な妖」
夏子「金毛九尾・・・」
瓜生「あなたのご先祖はその強大な金毛九尾の妖と契約をかわし望みを叶えた」
鈴ヶ森「まさか・・・」
瓜生「そのまさかです」
夏子「なに？」
鈴ヶ森「こいつらの目的は金毛九尾を呼び出し、契約を結び自分たちの望みを叶えることだ」
夏子「なにそれ・・・」
鈴ヶ森「残念だけど、あの妖を呼び出す方法なんてないよ」
瓜生「だから、あなたに来てもらったんですよ。嘉代子」
嘉代子「はい。あなたにかかった呪いを解析して金毛九尾の妖を呼び出します」

嘉代子が鈴ヶ森に手を向けている。

夏子「馬鹿なこといわないで！」
元徳「動くな！」
夏子「あなた達は呪の本当の怖さをわかっていないのよ！」
元徳「動くな！」
夏子「清ちゃんがその呪いのせいでどれだけ辛い思いをしたか・・・」
鈴ヶ森「夏子・・・」
元徳「え？聞いてる？」
嘉代子「なるほど」
瓜生「わかりましたか？」
嘉代子「はい。やはり、金毛九尾の妖を呼び出すには鈴ヶ森さんが必要です」
瓜生「では、あとの準備を」
嘉代子「はい。百日紅」

ブルー転換。前のエリア明かりがつくと、百日紅、ハナ、きん、辰雄、幸枝、うめがいる。百日紅が印を結んでいる。

幸枝「何をやっているんですか？」
ハナ「結界だそうです」
幸枝「結界ですって」
うめ「結界ですか」
きん「結界です」
辰雄「結界ねぇ」
百日紅「えい！」

術がかかる音。

百日紅「ものすごく増えている！」
嘉代子N「百日紅」
百日紅「はい。最後の結界をはり終わりました。これから口寄せをします」

百日紅が印を結ぶ。

百日紅「闇の力をもって我が呼びかけに答えよ・・・口寄せ！」

庭の方から爆発音が聞こえる。

幸枝「なんですか！」
うめ「お庭のほうですね」
辰雄「あそこに何かいます！すごく大きい・・・牛ですか？」
ハナ「体が蜘蛛みたいですよ！」
きん「なんですかあれは！」
百日紅「牛鬼の口寄せに成功しました」
全員「牛鬼？」

ブルー転換。前のエリア明かりがはいると喜重郎と荒尾が板付き。

荒尾「なんだこの化け物は・・・」
喜重郎「牛鬼だ」
荒尾「牛鬼？」
喜重郎「誰かがここに口寄せの術で呼び寄せたんだ」
荒尾「一体誰が！」

鳴き声が聞こえる。荒尾が銃を取り出す。

荒尾「くそ！」

荒尾が銃を撃つ。

荒尾「銃が効かない！」
喜重郎「相手は妖だぞ。そんなものが通用するか」
荒尾「やつを倒す方法はもちろんあるんだろうな。祓い屋」
喜重郎「あぁ。逃げる！」
荒尾「待って！」

牛鬼の鳴き声が聞こえる。喜重郎、荒尾が上手前に逃げる。照明変化で全灯。

夏子「なにあれ・・・」
元徳「動くなっつってんのに」
鈴ヶ森「あれは、牛鬼！」
瓜生「これで全てそろいました。後は満月を待つのみ」
嘉代子「牛鬼を抑えてきます」
瓜生「頼みましたよ」
嘉代子「鈴ヶ森さん、あなたも来てください」
鈴ヶ森「嫌だといったら？」

瓜生「熊八」

熊八が上手奥から登場。

熊八「はい。力うどんです。どうぞ」

うどんを鈴ヶ森に渡す。

熊八「では」

瓜生「(咳ばらいをして)熊八」

熊八「はい」

瓜生がゼスチャーで。

熊八「あ～」

熊八が夏子のところにいき。

熊八「動くな」

元徳「馬鹿なの？」

夏子「清ちゃん・・・」

瓜生「手荒なことはしたくないの」

鈴ヶ森「わかったよ！」

嘉代子「ついてきなさい」

ブルー転換して前のエリア明かりに変化、上手前から喜重郎と荒尾が登場。

荒尾「あの化け物を倒す方法はないのか？」

喜重郎「俺の法力じゃ無理だ」

荒尾「一体誰があんなものを・・・」

喜重郎「これが軍が考えている計画なのか！」

荒尾「こんな化け物、とてもじゃないが扱いきれない。上は一体なにを考えているんだ」

牛鬼の鳴き声。

喜重郎「来たぞ！俺が抑えるから逃げろ！」

荒尾「しかし！」

喜重郎が印を切る。

喜重郎「喝！」

牛鬼の鳴き声。

喜重郎「くそ・・・ダメだ！逃げろ！」

術が破れる音。エリア明かりから全灯すると嘉代子が立っている。

嘉代子「おやおや随分と苦戦されているようですね」

荒尾「嘉代子さん」

喜重郎「鈴ヶ森」

嘉代子「鈴ヶ森さん、あなたの力を見せてください」

喜重郎「何言ってんだ！そいつの力は物の声を聞くことだ！牛鬼なんて倒せるわけがないだろ！」

鈴ヶ森が前に出る。

喜重郎「おい！何やってんだ！」

鈴ヶ森「僕が相手だ！ぎゅう・・・」

牛鬼の鳴き声と鈴ヶ森が殴られる音。吹っ飛ぶ鈴ヶ森。

荒尾「鈴ヶ森君！」

喜重郎「鈴ヶ森！」

嘉代子「仕方ないですね」

嘉代子が前に出る。

喜重郎「あれを倒せるのか！」

嘉代子「ええ。百日紅！」

百日紅が下手奥から登場。

百日紅「ここに」

嘉代子「やりなさい」

百日紅「はい」

百日紅が扇子を構える。

百日紅「えい」

百日紅が扇を一閃すると牛鬼が倒される。

喜重郎「馬鹿な！あの牛鬼を一撃だと」

嘉代子「はい。ご褒美」

小さな包みを渡す。

百日紅「わーい」

喜重郎「緊張感！」

荒尾「鈴ヶ森君！」

喜重郎「そうだ！鈴ヶ森！」

鈴ヶ森が起き上がる。

喜重郎・荒尾「うわっ！」

鈴ヶ森「痛てて・・・」

嘉代子「噂は本当だったのですね」

荒尾「大丈夫なのか？」

鈴ヶ森「はい」

喜重郎「牛鬼のあの一撃を食らって大丈夫なわけないだろ！」

嘉代子「これが鈴ヶ森さんの本来の力です」

喜重郎「なんだと・・・」

奥から、ハナ、きん、幸枝、うめ、辰雄が登場。

うめ「これは一体・・・」

嘉代子「お嬢様を狙っていた妖です」

うめ「でもあれは！」

嘉代子「幸枝様。これで終わりではありません」

幸枝「まだ来るというのですか？」

嘉代子「はい。皆さまもお聞きください。今夜、満月が昇るころにまた妖がお嬢様を狙ってやってきます」

一同ざわつく。

嘉代子「しかし、ご安心を。私とこの百日紅、そして祓い屋の鹿園さん」
喜重郎「お、おう！」
嘉代子「巫女の山田さんが」
きん「え！あ、はい」
嘉代子「きっと妖を追い払ってみせましょう」
ハナ「お願いします～ぜひぜひ！守って～」
辰雄「お願いします～」

ブルー転換。場所は応接室。鈴ヶ森、喜重郎、きん、幸枝、うめ、荒尾が板付き。

荒尾「もうじき満月が昇る」
喜重郎「おい！鈴ヶ森。さっきのあれはどういうことだ！？」
鈴ヶ森「ぎりっぎりでかわしました」
喜重郎「嘘つけ！思いっきり殴られてたじゃねぇか！」
きん「何かあったのですか？」
喜重郎「こいつ、死なないんだよ」
きん「まさか・・・」
鈴ヶ森「・・・」
きん「本当なんですか！えっ！もしや妖怪ですか？」
鈴ヶ森「違いますよ！僕はれっきとした人間です」
喜重郎「呪いと関係があるんだろ」
荒尾「嘉代子さんもそう言ってましたね」
鈴ヶ森「呪いの効果があらわれると契約した妖の力が宿ってその・・・傷などが一瞬で治るんです」
きん「回復が早いってことですか？」
鈴ヶ森「はい」
幸枝「そんなことがあるんですか・・・」
荒尾「私も目の前で見ました」
喜重郎「どうしてさっきは隠してたんだよ」
鈴ヶ森「これを言うとさっきの牛鬼の時みたいに直ぐに試したがる人がいるんですよ。治るのが早いだけで、痛いんですからね」
喜重郎「そんな理由かよ」
幸枝「次はどんな妖怪が・・・」
うめ「ここにいれば大丈夫ですよ」
荒尾「私が守ります」
幸枝「うめ・・・」
荒尾「あれ？ついに見えていないですか？」

喜重郎「お嬢さん、白羽の矢はあんたがやった狂言だろ？」
幸枝「はい。すみません！」
うめ「私が提案したんです！」
幸枝「どうしても結婚したくなくて」
荒尾「お！ストレートにきましたね」
喜重郎「もうそんなことはどうでもいいんだよ」
荒尾「どうでもよくは・・・」
うめ「どういうことですか？」
喜重郎「さっきの牛鬼。あれは誰かがここに呼び寄せた」
幸枝「一体誰が！」
喜重郎「さぁな」

上手から元徳、瓜生、嘉代子に連れられて夏子が登場。

元徳「満月が昇った。始めようか」
瓜生「はい。嘉代子」
きん「何をですか？」
嘉代子「はい。鈴ヶ森さん、くれぐれも変な気は起こさないように。百日紅がいることをお忘れなく」
鈴ヶ森「わかっています」
夏子「清ちゃん・・・」
嘉代子「あなたも」
夏子「・・・はい」
嘉代子「お嬢様こちらに」

幸枝がセンターに来る。

荒尾「万里小路さん、何をするんですか？」
元徳「まぁ見ていたまえ」
嘉代子「お願いします」

瓜生が印を結ぶ。

瓜生「はい。あまたの力を持って我、汝に問いかける・・・」

照明変化。術がかかる音が鳴る。

荒尾「こ、これは先ほどの・・・」

喜重郎「口寄せだ！しかも、この屋敷全体が結界になってやがる！」
嘉代子「先ほどの牛鬼の様な強力な妖怪の生贄」
嘉代子「それに大きな力を持った能力者と」

嘉代子が印を結ぶと喜重郎にサスが当たり、動けななくなる。

喜重郎「なんだ・・・これは・・・」
嘉代子「巫女の人柱」

嘉代子が印を結ぶときんにサスが当たり、動けなくなる。

きん「動けない・・・」
嘉代子「最後に・・・幸枝様という依り代」

嘉代子が印を結ぶと幸枝にサスが当たり、動けなくなる。

幸枝「い、痛い・・・」
うめ「お嬢様！」

うめが幸枝を助けようと近寄るがはじかれる。

幸枝「う・・・め」
嘉代子「鈴ヶ森さん」

嘉代子が印を結ぶと鈴ヶ森にサスが当たり、動けなくなる。

鈴ヶ森「ぐわっ！」
夏子「やめて！」
元徳「動くな！」
嘉代子「これで鈴ヶ森さんに憑りついている金毛九尾を呼び出すことができます！」
喜重郎「金毛九尾だと・・・馬鹿な真似はやめろ！」
荒尾「知っているのか！」
喜重郎「伝説級の妖だ。そんなものを人間が口寄せで呼べるわけがない」
荒尾「万里小路さん！」
元徳「陸軍から怪しまれると厄介だから受けた見合いの話だったが・・・結婚はあきらめてくれ」
幸枝「お父様・・・」
元徳「やれ！」

瓜生「口寄せ！」

口寄せの術がかかる音。鈴ヶ森、喜重郎、きん、幸枝が苦しむ。音が鳴りやみ、4人倒れる。

夏子「清ちゃん！」
荒尾「幸枝さん！」
うめ「お嬢様！」
元徳「動くんじゃないぞ！」

瓜生がふらつく。

嘉代子「大丈夫ですか？」
瓜生「ええ」
元徳「何も起きないぞ？どうなったんだ？」

上手からハナと辰雄が登場。

ハナ「何の音ですか？え？え？なんですかこれ！？」
辰雄「妖怪が来たのですか！」

幸枝がふらふらと立ち上がる。鈴ヶ森、きん、喜重郎も起き上がる。

荒尾「幸枝さん！」

荒尾が近づくと幸枝に殴られる。

荒尾「ぶべら！ここまで嫌います？」
嘉代子「口寄せに成功しました！」
元徳「本当か！」
嘉代子「はい」
元徳「これで願いが叶うぞ！」
幸枝「我の眠りを覚ますものは誰ぞ？」
元徳「この、万里小路もと・・・」

荒尾が銃を元徳に向けている。

荒尾「動くな！」

元徳「何のつもりだ」
荒尾「まさか、こんな事を企んでいたとはな・・・」
ハナ「動かないで」

ハナが荒尾に銃を向けている。

元徳「どういう状況？」
荒尾「軍の人間はお前だったのか！」
ハナ「銃を置きなさい」

荒尾が銃を床におく。

ハナ「(辰雄に)拾いなさい」
辰雄「は、はい！」

辰雄が銃を拾ってハナに渡す。

荒尾「栗林！お前も軍の人間だったのかっ！」
辰雄「私は！画家です・・・」
ハナ「彼は画家よ」
荒尾「紛らわしい」
辰雄「すみません」
元徳「どうなっているんだ！」
荒尾「先の世界大戦を勝利で収めた陸軍は次に起こるであろう世界大戦に備えて、最強の部隊を作ろうと計画を立てた。そして、その計画は化学や呪術といったありとあらゆるものを駆使し最強の兵隊・・・つまり死なない兵隊を作るという結論に達したのだ」
夏子「そんなの作れるわけないじゃない」
ハナ「そんな不可能な願いを叶えてくれる強力な妖。金毛九尾と契約をした一族がいるじゃない。そ・こ・に」
荒尾「一部の上層部しか知らないこの作戦の実行部隊がそいつの所属する７３１部隊」
ハナ「あら、そこまで調べていたの」
荒尾「まさか本当にそんな部隊があったとはこっちも驚きだよ」
ハナ「これは軍の中でも最重要機密なの。荒尾少尉」
荒尾「こんな人道に反することが許されるわけがないだろう！」
ハナ「人道に反するというのなら戦争自体がそうでしょう」
荒尾「だが！」
ハナ「その戦争を最小限の犠牲で終わらせるといっているのよ。これこそが平和的な解決

じゃなくて？」
荒尾「化け物と契約を交わした兵隊はどうなる！」
ハナ「我が大日本帝国が世界最強となるための犠牲です。みな、喜んで志願するでしょう」
荒尾「狂ってやがる」
瓜生「嘉代子！術を解きなさい！」
嘉代子「・・・」
瓜生「嘉代子！」
嘉代子「瓜生様、それはできません」
瓜生「・・・まさか！」
ハナ「嘉代子」
嘉代子「はい」
瓜生「どうして！」
嘉代子「私は万里小路家に仕える影ではなく、表舞台でこの力を試してみたくなりました」
瓜生「嘉代子・・・」
ハナ「嘉代子がいなければこの計画は成り立ちませんからね。私もこうして詩人としてこちらにこさせてもらったんです」
瓜生「馬鹿なことを・・・」
ハナ「私の詩、いけてたでしょ」
嘉代子「願いをどうぞ」
鈴ヶ森「まて！そいつは金毛九尾なんかじゃないぞ」
ハナ「なに？」
嘉代子「そんなはずは・・・」
瓜生「確かに、その妖は金毛九尾ではありません」
鈴ヶ森「この術式に反応したどこぞの妖だ」
ハナ「嘉代子！」
嘉代子「しかし、こいつが強力な妖だということは間違いありません。契約をすれば望みは叶うはずです」
ハナ「(うめに)おい」
うめ「はい」
ハナ「貴様、こいつに願いを言え。死なない兵隊を作れと」
うめ「い、いやです」
ハナ「このままではお嬢様が死ぬぞ」
鈴ヶ森「やめろ・・・」
ハナ「さぁ！妖怪よ！こやつと契約をちぎり、願いを叶えたまえ！」
うめ「お、お嬢様を守ってください！」
ハナ「貴様っ！」
幸枝「いいだろう。その願い叶えてやろう」

術がかかる音。術を使い壁を破壊し出て行こうとする。

ハナ「どこにいく！」

幸枝「まずはこの辺りの人間を食らう」

うめ「お嬢様を守ってくれるんじゃないの！」

幸枝「あぁ。守るさ。守るのにも力が必要だろ？そういうことだ」

出て行こうとして立ち止まり。

幸枝「あぁ。そうだ。誰だか知らないが呼び出してくれてありがとうよ。これでまた人間が食らえる」

幸枝が下手前に退場。

元徳「幸枝！」

ハナ「おい！話が違うじゃないかっ！」

嘉代子「金毛九尾の呼び出しには失敗しましたが、妖との契約には成功しました」

ハナ「あれが成功と呼べるのか！」

嘉代子「しかし、望みが叶うことはわかりました」

ハナ「契約を結ぶ人間の選定と妖怪の呼び出しにかかる手間を考えなおさねばなりませんね」

嘉代子「はい」

ハナ「いきましょう」

荒尾「おい！あれをあのままにしていくつもりか」

ハナ「私には関係ない」

瓜生「熊八！」

熊八が後ろから登場。

熊八「手荒なことはしたくありません」

ハナ「く・・・」

ハナから拳銃を奪い、荒尾に渡す。

熊八「どうぞ」

荒尾「あ、ありがとう。貴様にはこの責任を取ってもらう」

鈴ヶ森が立ち上がり。

鈴ヶ森「やつを止めないと・・・」
夏子「もう、ボロボロじゃない・・・」
鈴ヶ森「このままじゃ犠牲者がでる」
夏子「でも・・・」
喜重郎「何か方法があるのか！」
鈴ヶ森「金毛九尾の力を借りてみる」
喜重郎「そんなことができるのかっ！」
鈴ヶ森「たぶん」
喜重郎「たぶんって・・・」
鈴ヶ森「僕もこの力は使ったことがないんだ」
喜重郎「もしかして・・・」
鈴ヶ森「うん。僕にはもどれないかもしれない」
夏子「どういうことよ・・・」
喜重郎「金毛九尾の力に取り込まれちまうってこった」
夏子「そんな！嫌だよ！清ちゃん！」
鈴ヶ森「そうなったら、喜重郎さん。僕を殺してください」
夏子「え・・・何言ってるの？」
喜重郎「・・・わかったよ」
夏子「清ちゃんがそこまでする必要ないじゃない！」
鈴ヶ森「夏子。生きろよ」

鈴ヶ森が下手前から退場。

夏子「清ちゃん！・・・清ちゃんにはね、3っつ下の弟がいたの・・・でも、その弟が5歳の時に呪いが始まった・・・小さかったからかな、半年もしないうちに亡くなった・・・だから一族にかかった呪いを解くんだって、もう訳もわからずに命を取られるのはごめんだって・・・お願い！清ちゃんを助けて・・・」

喜重郎が立ち上がり。

喜重郎「(泣きながら)そんな話聞いたら放っておけねぇだろ」
夏子「助けてくれるの？」
荒尾「彼には病気の妹がいてね。その高額な治療費を稼ぐために今回の仕事を受けたんだ」
喜重郎「うるせぇ！俺の事はいいんだよ」
夏子「お願いします！私は何もできないから・・・」
喜重郎「(きんに)お前もこい」
きん「私は巫女ですが何も力ありません。行っても邪魔になるだけです」
喜重郎「お前は力がないんじゃなくて目覚めてなかっただけだ」

きん「え・・・」
喜重郎「口寄せの術に使われたことで力が目覚めてるよ」
きん「本当ですかっ！」
喜重郎「あぁ」
きん「いきます！」
瓜生「熊八も連れて行きなさい。私の式神です。役にたつでしょう」
喜重郎「好きにしろよ」
瓜生「熊八、頼みましたよ」
熊八「はい」
元徳「頼む。幸枝を・・・幸枝を助けてくれ！・・・・頼む」

喜重郎ときんと熊八が下手に退場。

瓜生「嘉代子、あなたもいきなさい」
嘉代子「私はもうあなたの言うことには従いません」
瓜生「ならば私が責任を持ってあなたを止めるしかありませんね」
嘉代子「百日紅！」

百日紅が後ろから登場。

百日紅「はーい」
瓜生「私に勝てるとでも？」

ブルー転換。明かりがはいると幸枝が歩いている。後ろから鈴ヶ森が登場。

鈴ヶ森「待て！」
幸枝「ほう。お主呪われておるのか、しかもその気配は・・・そうか、お主が、かの金毛九尾を封印した一族か」
鈴ヶ森「封印？」
幸枝「なんだそんなことも知らぬのか」
鈴ヶ森「封印とはどういうことだ！」
幸枝「自身で確かめればよかろう」
鈴ヶ森「お前は僕がとめる」
幸枝「笑止！貴様に何ができる！死ね！」

上手袖中から喜重郎ときんの声がする。

喜重郎「喝！」

きん「きえー！」

術がかかる音。幸枝がそれをはじく。

幸枝「なんだ？」

上手前から喜重郎ときんと熊八が登場。

鈴ヶ森「きんさん！太郎さん！」
喜重郎「もうそれでいい」
幸枝「人間風情が束になればこの温羅に勝てるとでも？」
喜重郎「温羅だと！」
きん「有名なのですか？」
喜重郎「岡山の吉備に伝わる古代の鬼だ」
きん「強いんですか？」
喜重郎「あぁ。伝説になるほどにはな」
きん「帰っていいですか・・・」
幸枝「黒き炎よ・・・焼き尽くせ！」

幸枝の手から炎が出る。

喜重郎「来るぞ！」
きん「こないで！」
幸枝「黒炎！」
熊八「危ない！」

幸枝が炎をだす。熊八が３人をかばう。

鈴ヶ森「熊八さん！」
熊八「あついーーーーーぎゃーーーーー」

暗転して明転すると割れたどんぶりがおいてある。

きん「やられた！」
喜重郎「何しにきたんだよ！」
鈴ヶ森「熊八さん！どんぶりばちが依り代だったんですね」
喜重郎「そこかよ」
きん「弱すぎないですか？」

喜重郎「違う、奴が強すぎるんだ」
幸枝「邪魔をするな」
喜重郎「俺たちでやつの動きをとめる。そのすきに金毛九尾の力をかりろ」
幸枝「何かと思えば・・・金毛九尾が人間に協力するわけがない」
喜重郎「力を貸せ！」
きん「はい！」

喜重郎が印を結ぶ。

喜重郎「不動結界！」
きん「きえー！」

術の音。幸枝の動きが止まる。

幸枝「なに！」

鈴ヶ森が印を結ぶ。

鈴ヶ森「さぁ、金毛九尾よ・・・お前の声を聞かせておくれ」

術の音がなると鈴ヶ森にサスがはいる。

N「貴様か、我を呼んだのは・・・」
鈴ヶ森「金毛九尾・・・僕に力を貸してほしい」
N「片腹いたいわ。我を封じた一族の末裔が我の力をほっするのか？」
鈴ヶ森「頼む！」
N「嫌だね」
鈴ヶ森「そうか、お前でも温羅とかいう鬼には勝てないのか・・・」
N「なに？」
鈴ヶ森「だから力を貸してくれないんだろ？」
N「あのような鬼ごときに我が負けるはずがなかろう」
鈴ヶ森「証明してみせてよ」
N「くっくっく・・・よかろう、貴様の口車に乗ってやるわ」
鈴ヶ森「本当か！」
N「あぁ。ただし、我の力の源は憎悪や憎しみ。それに貴様が絶えることができればの話だがな」
鈴ヶ森「耐えてみせるさ」
N「存分に見させてもらおう」

照明が元に戻る。

喜重郎「鈴ヶ森！まだか！もう限界だ！」

きん「結界が破れる・・・」

結界が破れる音。

幸枝「死ね！黒炎！」

幸枝が炎をだす。それをいなす鈴ヶ森。

幸枝「なに！」

喜重郎「鈴ヶ森なのか？」

鈴ヶ森「お待たせ！」

きん「やったーー！」

幸枝「馬鹿な！金毛九尾が力を貸したのいうのか！黒炎！」

幸枝の手から炎が出るが鈴ヶ森がいなす。

幸枝「おのれ・・・」

鈴ヶ森「温羅、勝手に呼び出したのにごめん。元の世界へおかえり」

幸枝「やめろ」

鈴ヶ森が手をかざす。

幸枝「やめろー！」

鈴ヶ森「・・・滅」

明かりが変わり、幸枝から妖の気配がきえる。幸枝が倒れる。

きん「大丈夫ですか？」

幸枝「えぇ」

鈴ヶ森が片膝をつく。

喜重郎「鈴ヶ森？」

きん「鈴ヶ森さん！」

鈴ヶ森「ふははは！」

喜重郎「まさかっ！」
きん「金毛九尾に・・・」
鈴ヶ森「我は金毛九尾！」
喜重郎「取り込まれたか・・・成仏しろよ鈴ヶ森！」
鈴ヶ森「嘘です！嘘です！冗談ですよ！」
喜重郎「ふざけんなよ！」
鈴ヶ森「すみません。というか躊躇なく殺しにきましたね」
喜重郎「まぁ、取り込まれなくてよかったよ・・・」
鈴ヶ森「はい」
きん「冗談は顔だけにしてください」
鈴ヶ森「え・・・」

ブルー転換。瓜生、嘉代子、百日紅、元徳、夏子、うめ、荒尾、ハナ、辰雄が板付き。百日紅がやられている。

嘉代子「百日紅！」
瓜生「一族の長としてあなたの力を封じます。うっ・・・」

瓜生がよろめく。

うめ「大丈夫ですか？」
瓜生「熊八がやられたようです・・・」

うめが瓜生を座らせる。

嘉代子「どうしてわかってくれないのですか・・・」
瓜生「力は表に示すものではありません」
嘉代子「我々は一生影のままなのですか？」
瓜生「力に頼れば力に飲み込まれてしまいます」
嘉代子「うまく使えば・・・」
瓜生「うぬぼれるでない！我らは力を少し借りているだけ・・・操れるなどと思わぬことです」
荒尾「（外を見て）向こうも終わったようだな。万里小路さん、今回の件はいくらあなたでも罪は免れません」
元徳「わかっている・・・」
辰雄「あの！ハナさんはどうなるんですか？」
荒尾「軍法会議にかけられる。よくて終身刑、恐らくは死罪」
辰雄「そんな！」

上手前から幸枝、きん、鈴ヶ森、喜重郎が登場。

うめ「お嬢様！」
元徳「幸枝は無事なのか！？」
喜重郎「命に別状はない」
元徳「そうか・・・」

うめが幸枝にかけよる。

幸枝「うめ・・・」
うめ「ご無事でよかったです・・・」
元徳「幸枝・・・」
幸枝「私は・・・この家をでます」
元徳「わかった・・・」
うめ「元徳様！本当にそれでいいんですか！」
幸枝「うめ？」
元徳「幸枝がそれを望んでいるんだ」
うめ「幸枝様！」
幸枝「は、はい」
うめ「今回の件も元徳様は幸枝様を思っての事だと思います」
幸枝「そんなわけないでしょう！私はこんなひどい目にあったんですよ」
うめ「そうなんですけど・・・元徳様！」
元徳「うるさい！使用人風情が利いたふうな口を聞くな！」
幸枝「そういうところも嫌いです」
元徳「親に向かってその口の利き方はなんだ！」
うめ「幸枝様、元徳様の遺書があったの覚えていますか？」
幸枝「それがどうしたの？」
うめ「生きているのにどうして遺書があるかお考えください」
幸枝「趣味？」
元徳「あれ？うちの娘こんなに馬鹿だったかな？」
うめ「嘉代子様、元徳様の遺書をお持ちですよね？」
嘉代子「え、ええ」
うめ「貸してください」
嘉代子「はい」

うめが嘉代子から遺書を受け取る。

元徳「おい！」

うめ「黙っていてください！」
元徳「・・・」
うめ「読みます！・・・私、字が読めませんでした！」
喜重郎「なんだそれ」
うめ「元徳様、読んでください」

遺書を渡す。

元徳「自分で自分の遺書を読むなんて・・・」
うめ「このままだと幸枝様が出て行ってしまいますよ！」
元徳「わかったよ。この遺書が読まれているということは私はすでに・・・やっぱり、恥ずかしい！」
瓜生「私が読みます！」
元徳「お、おう」

瓜生に遺書を渡す。

うめ「字、読めますか？」
瓜生「ええ。この遺書が読まれているということは私はすでにこの世にはいないだろう」
元徳「恥ずかしい」

瓜生が咳ばらいをする。

元徳「わかっている」
瓜生「幸枝・・・母親が亡くなってから随分寂しい思いをしたことだろう。俺は厳しくすることでしかお前に接することができなかった、でも、それは決してお前を嫌っていたからではない。まして、この万里小路家の為でもない。幸枝、お前に幸せになってほしかったからだ。私は敵を作りすぎた。いずれは誰かに報復されるかもしれない。その前にお前に危険がおよばないようにしておきたかったのだ。これが読まれているということは嘉代子の言った通り、妖怪を呼び出し、俺の魂と引き換えに幸枝の安全が保障されていることだろう。だが、気にしなくていい。これは俺自身が招いたことだ。そして、俺の一番の願いは、幸枝、お前が幸せになってくれることだ。幸枝、私の娘として生まれてきてくれてありがとう。父より」
幸枝「お父様・・・」
元徳「幸枝・・・」
うめ「ひゅーひゅー」
瓜生「台無し・・・」

うめ「すみません」
幸枝「うめ、ありがとう」
うめ「とんでもありません」

荒尾が泣き出す。辰雄が手ぬぐいをだして。

辰雄「これをどうぞ」
荒尾「ありがとう」
辰雄「もってますよ」

荒尾が銃を辰雄に渡す。

辰雄「動くな！」
元徳「なにをする！」

元徳に銃を向けて。

元徳「貴様！」
幸枝「お父様！」
うめ「旦那様！」
荒尾「どうしてこうなった・・・やめろ！なんのつもりだ」
辰雄「ハ、ハナさんを解放しろ！」
荒尾「なんだと?」
ハナ「栗林さん！助けて！」
荒尾「黙れ！（栗林に）銃をおろせ」
辰雄「こいつがどうなってもいいのか！」
荒尾「・・・よくはない」
元徳「ちょっと悩んだよね」
辰雄「半年前の私は絵が描けなくなっていた・・・何をどうやってもうまくいかない、解決方法もわからない、もういっそ筆を折ろうと・・・そんな時にハナさんがここに来たんだ。彼女は私の絵をほめてくれた、そのままでいいと言ってくれた、その一言に私がどれだけ救われたか・・・私には、私が絵を描き続けるためにはハナさんがいてくれないとダメなんだ！」
荒尾「ここでこいつを開放しても軍から逃げきることなど到底できない」
辰雄「うるさい！」
元徳「刺激するな～」
辰雄「う、う、う撃つぞ！」
元徳「撃たない！君は撃たないよ～」

辰雄「銃をよこせ！」
元徳「銃をわたせ！」
辰雄「黙ってろ！」
元徳「黙ってる！」
辰雄「早くしろ！」
荒尾「くそ・・・」

荒尾が銃を差し出すとハナがそれを受け取る。

ハナ「ありがとう」
辰雄「私も一緒にいかせてください」
ハナ「いいわよ。嘉代子、口寄せの実験体として鈴ヶ森を連れていきます」
嘉代子「はい。百日紅」
百日紅「はい」
瓜生「はっ！」

瓜生の術で嘉代子の動きを止める。

嘉代子「まだこんな力が・・・」
百日紅「嘉代子様！」
ハナ「なにをしているの！やめなさい！」

ハナが銃を瓜生に向ける。

瓜生「撃ちなさい」
元徳「まじで？」
ハナ「なにを・・・」
瓜生「私を止めたければ撃ちなさい！」
ハナ「・・・栗林！鈴ヶ森を」
辰雄「は、はい！」
ハナ「（喜重郎ときんに）あなた達も動かないように」
きん「卑怯よ」
ハナ「なんとでもいいなさい」
喜重郎「くそ・・・」

栗林が鈴ヶ森のところにいく。夏子が立ちはだかる。

鈴ヶ森「夏子・・・」

夏子「させない！」
辰雄「ど、どきなさい」
夏子「いやよ！」
辰雄「こ、この銃が見えないのか！」
鈴ヶ森「夏子、どけ！」
ハナ「栗林！」

辰雄が夏子を銃で撃つ。瓜生の術がとけて嘉代子が解放される。

夏子「え・・・」
辰雄「あ・・・」

夏子が倒れる。

鈴ヶ森「夏子・・・」

鈴ヶ森が夏子にかけよる。

鈴ヶ森「夏子ーーー！」
辰雄「ち、違うんだ！う、撃つつもりは・・・」
ハナ「栗林！」
辰雄「はい！」
ハナ「連れてきなさい」
辰雄「でも・・・」
ハナ「早く！」

辰雄が鈴ヶ森に近づく。鈴ヶ森が苦しみだす。

辰雄「こい！」
鈴ヶ森「うわーーーー！」
辰雄「ひゃ！」
ハナ「なに？」

鈴ヶ森がゆっくり立ち上がる。

N「そうだ憎め」

鈴ヶ森がにサスがはいる。

鈴ヶ森「やめろ・・・」
N「やつのせいであの女は死ぬかもな！」
鈴ヶ森「うるさい！」
N「憎悪しろ！」
鈴ヶ森「やめろ！」
N「それが我の力となる」
鈴ヶ森「やめろーーーー！」

照明が元に戻る。

ハナ「どうなってるの・・・嘉代子！」
嘉代子「わかりません・・・」
鈴ヶ森「ふふふ・・・はーはっはっはー！ついに、ついに蘇ったぞ！」
喜重郎「まさか・・・」
瓜生「鈴ヶ森さんの中の金毛九尾が目覚めたようです」
きん「こ、こいつはどれくらいヤバいの？」
喜重郎「さっきの温羅の数十倍はやばい」
きん「そんなに！」

鈴ヶ森がうでをふると辰雄が切られる。

荒尾「危ない！」

荒尾が幸枝をかばう。

辰雄「うわっ」
ハナ「栗林！」
鈴ヶ森「一応、鈴ヶ森の願いも聞いておいてやらないとな」
荒尾「ぐわ」
幸枝「荒尾さん？」
瓜生「はっ！」

瓜生が術を使う。鈴ヶ森の動きが止まる。

瓜生「元徳様、お逃げください」
元徳「わかった！幸枝！」
幸枝「はい。うめも」
うめ「はい」

元徳、幸枝、うめが上手に退場。

瓜生「荒尾さん、あなた達も」
荒尾「あなたは？」
瓜生「こうなった原因は我々にあります。最後まであがいてみますよ」
荒尾「わかりました。ご武運を」
瓜生「あなたも」
荒尾「こい！」

ハナが上手に退場。辰雄が荒尾に連れられて上手に退場。

瓜生「嘉代子、あなたも逃げなさい。他の方も！」
きん「私は巫女です。目の前の妖をほほほほほうってはおけません！」
喜重郎「乗っ取られた殺すって約束しちまったからな」
瓜生「馬鹿な人達ですね」
喜重郎「お互いに損な役回りだな」
瓜生「まったく・・・」
嘉代子「百日紅！」
百日紅「はーい」
瓜生「嘉代子・・・」
嘉代子「勘違いしないでください。自分の力を証明するためです」
瓜生「わかりました」
鈴ヶ森「もういいか？」

鈴ヶ森が動くと術が解ける。

喜重郎「しかし、こんな化け物どうやって戦うんだよ！」
鈴ヶ森「戦う？貴様らがわしと？笑わせてくれる。戦いにもならぬな！」

鈴ヶ森の腕の一振りで全員吹き飛ぶ。喜重郎が印を結ぶ。

喜重郎「六神通、其の二、天眼通（てんげんつう）！」

術がかかる。

きん「氏神様よ、力をかしてください！きえー！」

術がかかる。

嘉代子「百日紅！」
百日紅「えい！」

百日紅が扇で切る。

瓜生「はっ！」

術がかかる。

鈴ヶ森「ふん！」

鈴ヶ森が全てをはねのける。

喜重郎「ここまでとは・・・」
鈴ヶ森「絶望しろ」

鈴ヶ森が手をふると喜重郎、きん、百日紅が切られて倒れる。。嘉代子が結界をはって瓜生をかばう。

瓜生「嘉代子！どうして！」
嘉代子「どうしてでしょうね・・・母上・・・」

嘉代子が倒れる。

瓜生「嘉代子！」

3場

夏子が目覚める。

夏子「え・・・なにこれ・・・清ちゃん？」
喜重郎「そいつは・・・鈴ヶ森じゃねぇ。金毛九尾だ」
夏子「清ちゃんが？」
鈴ヶ森「お前のおかげで復活することができたよ。ありがとう」
夏子「清ちゃんを返してよ！」
鈴ヶ森「鈴ヶ森はここにはもういない」
夏子「そんな・・・」

鈴ヶ森が笑っているが苦しみだす。

鈴ヶ森「・・・夏子・・・」
夏子「清ちゃん！」
鈴ヶ森「かはっ！あがくな！鈴ヶ森！」

夏子が立ち上がり。

喜重郎「何するつもりだ」
夏子「清ちゃんはそこにいる」
喜重郎「死ぬぞ！」
夏子「清ちゃん！」

夏子が鈴ヶ森に近づく。

鈴ヶ森「うわー！」

鈴ヶ森が夏子を切り裂くが喜重郎が助けに入る。

喜重郎「ぐわー」
夏子「祓い屋さん！」
喜重郎「鈴ヶ森、だせぇことすんなよ・・・」

喜重郎が倒れる。

鈴ヶ森「ぐ、ぐわーーー」
夏子「負けないで！」
瓜生「山田さん！鈴ヶ森さんの動きを止めてください」
きん「私には無理です！」
瓜生「私が力を貸します」
きん「瓜生さんがやってください」
瓜生「今の私にはそこまでの力はありません」
きん「でも・・・」
瓜生「迷っている場合ではありません！早く！」
きん「は、はい！」

二人印を結び、同時詠唱。

瓜生「深淵よりも暗きもの。彼の者の動きを禁ずる！絶！」
きん「八百萬神等（やおよろずのかみたち）を神集え（かむつどえ）に集え賜い！
きえー！」

術がかかる。鈴ヶ森の動きが止まる。

鈴ヶ森「笑止！」

鈴ヶ森が動く。

きん「う、動きを封じきれません！」
鈴ヶ森「相手が悪かったな」
瓜生「ダメか・・・」
喜重郎「不動結界！」

術がかかる。

きん「喜重郎さん！」
喜重郎「わりに合わない仕事だぜ・・・」
鈴ヶ森「おのれっ！」

鈴ヶ森が動こうとするが動けない。

瓜生「夏子さん、鈴ヶ森さんを連れ戻すのです」
夏子「はい」
きん「がんばって！」
喜重郎「いけー！」

夏子が鈴ヶ森に近づく。

夏子「清ちゃん・・・そんな奴に負けないで・・・お願い、元の清ちゃんに戻ってよ・・・」
鈴ヶ森「あきらめろ、この体は我のモノだ！」

夏子が鈴ヶ森の顔を触る。

夏子「清ちゃん・・・」

辺りが暗くなり、二人だけの空間になる。

鈴ヶ森「・・・夏子・・・」
夏子「清ちゃん！」
鈴ヶ森「無駄なあがきよ。鈴ヶ森の意識がなくなるのも時間の問題」
夏子「清ちゃんからでていきなさいよ！金毛九尾！」
鈴ヶ森「ならば女。我と契約をするか？」
夏子「契約・・・」
鈴ヶ森「そうだ。貴様が我に鈴ヶ森から出て行けと願えばその願いを聞き届けてやろう」
夏子「本当に！」
鈴ヶ森「あぁ。そのかわり、女。お前の体と魂を頂く。我を封じていたこの体は居心地がわるくてな・・・」
夏子「わかった・・・契約する」
鈴ヶ森「よかろう。では、その体と魂をもらいうけるとしよう」

鈴ヶ森の右手が夏子の肩にかかる。

夏子「清ちゃん、ごめんね」

それを左手がとめる。

鈴ヶ森「金毛九尾・・・」
N「馬鹿な、どこにこんな力が・・・」
鈴ヶ森「てめぇ！ふざけんなよ・・・」
夏子「清ちゃん！」
N「鈴ヶ森！抗っても無駄よ！これは我とそやつとの契約！貴様に阻止などできぬ！」
鈴ヶ森「ごちゃごちゃうるせぇ！」
N「な、なんだと！」
鈴ヶ森「夏子は・・・」
N「ま、まて！」
鈴ヶ森「夏子は・・・」
N「いやだ！」
鈴ヶ森「お前になんか・・・」
N「また封印されるのはいやだー！」
鈴ヶ森「・・・やらねぇよ！」
N「鈴ヶ森ーーーーーー！」

金毛九尾の声が消えていく。照明が元に戻ると鈴ヶ森が倒れこむ。

夏子「清ちゃん！」

喜重郎「どうなったんだ？」
瓜生「鈴ヶ森さんが金毛九尾をもう一度自分の中に封印したようです」
きん「すごいですね・・・」
鈴ヶ森「・・・夏子」
夏子「よかった～～～」
鈴ヶ森「泣くなよ」
夏子「だって～清、ちゃんが、もう、もどって、こな、い、って、おも、った、から」
鈴ヶ森「ありがとうな」
夏子「今度、こんな、ことしたら、私が殺すからね～」
鈴ヶ森「き、気を付けます」

溶暗

エピローグ

明かりが入ると怪奇屋の店の前。蝉が鳴いている。上手から荒尾が登場。

荒尾「えーと・・・浅草区２丁目と・・・あ！あった、怪奇屋。失礼する。誰かいないか？」

袖中から鈴ヶ森の声がする。

鈴ヶ森「わかったって！」

鈴ヶ森が下手奥から登場。

鈴ヶ森「たく、夏子のやつ・・・」
荒尾「鈴ヶ森君」
鈴ヶ森「・・・誰？」
荒尾「荒尾だよ！荒尾有良」
鈴ヶ森「あ、あ～！豆腐屋の！」
荒尾「こんな格好の豆腐屋がいるわけないだろ」

袖から夏子の声。

夏子「清ちゃん！お金！」

夏子が下手奥から登場。

夏子「清ちゃん！ってあれ？荒尾さん？」
荒尾「夏子君」
夏子「どうしたんですか？」
鈴ヶ森「夏子、知り合い？」
荒尾「本当に覚えてないのかい？」
鈴ヶ森「まぁな！」
夏子「褒めてない。ほら、1ヶ月前の万里小路家にいたでしょ」
鈴ヶ森「あぁ！思い出した！お嬢さんにフラれてた人だ」

荒尾が咳ばらいをする。

夏子「すみません」
荒尾「いえ」
鈴ヶ森「で、何しに来たの？」
荒尾「いや、あの事件の報告をと思ってね」

袖中から喜重郎の声が聞こえる。

喜重郎「その話」

喜重郎ときんが下手奥から登場。

喜重郎「俺にも聞かせてもらおうか」
きん「どうも」
荒尾「鹿園さん、山田さん。どうしてここに？」
夏子「二人とも清ちゃんのこと気に入ったみたいでよく遊びにくるんです」
喜重郎「別にきにいっちゃいねぇ」
きん「私は神社の仕事があるので喜重郎さんほどじゃないですけど」
喜重郎「俺がしょっちゅう来てるみたいに言うな」
きん「5日連続で来てるんですよね？」
夏子「はい！」
鈴ヶ森「邪魔なんだけどね」
喜重郎「邪魔でもねぇ」
夏子「あの！嘉代子さんは大丈夫だったんですか？」
荒尾「あぁ。かなりの深手だったけどね」

上手から嘉代子、瓜生、百日紅、熊八が登場。

瓜生「嘉代子、また一から修行のやりなおしです」
嘉代子「えー」
瓜生「えーじゃない！」
嘉代子「はい！」

嘉代子、瓜生、百日紅、熊八が上手に退場。

夏子「あの二人が親子だったなんてねぇ」
荒尾「あの事件以来、二人の関係はかわったようです」
きん「よかったですね」
夏子「うん」
喜重郎「主犯の詩人はどうなったんだよ」
荒尾「主犯の寺内ハナと画家の栗林辰雄は行方不明です」
喜重郎「行方不明？」
荒尾「はい」

ハナと辰雄が上手から登場。

荒尾「今回の事件自体が軍の上層部によってもみ消されました」
喜重郎「おいおい、どんだけ大物がからんでるんだよ」
荒尾「事件そのものがなくったので、二人の罪も帳消しに」
喜重郎「罪がなくなったのになんで逃げたんだよ」
荒尾「わかりません」
ハナ「今にみていなさい」
辰雄「私もです！」

ハナと辰雄が上手に退場。

きん「あの、私達は消されたりしませんよね？」
荒尾「それは大丈夫ですよ」
きん「よかった」
荒尾「たぶん」
喜重郎「たぶんかよっ！」
荒尾「冗談ですよ」
喜重郎「冗談は嫌いだっていってただろ」
荒尾「嫌いだ」
喜重郎「なんなんだよ！」
夏子「じゃー万里小路さんも？」

上手から元徳が登場。

荒尾「もちろん、罪にはとわれなかったよ」
夏子「そっか・・・」
元徳「え！これだけ？」

元徳が退場。

夏子「幸枝さんにはよかったのかな」
きん「その幸枝さんとはどうなったんですか？」
荒尾「それは・・・その・・・」
喜重郎「なんだよ！やっぱりフラれたのかよ～」

下手から幸枝とうめが登場。

幸枝「あら、みなさんお揃いで」
夏子「幸枝さん！」
うめ「お久しぶりです」
きん「どうしたんですか？」
喜重郎「なんだよ、俺に何かようか？」
幸枝「え？いえ」
荒尾「話は終わりました」
幸枝「そうですか」
喜重郎「え？え？」
幸枝「では有良さん」
喜重郎「有良さん？」
幸枝「いきましょう」
荒尾「はい！」
喜重郎「ちょっと待て！」
幸枝「なんでしょう？」
喜重郎「なんで？」
幸枝「なんでとは？」
喜重郎「いや、だってすげー嫌ってたじゃん」
幸枝「あぁ。鈴ヶ森さんが金毛九尾に憑りつかれて暴れた時に守ってくれたから・・・」
喜重郎「生きる意味を探すとかいってなかったっけ？」
幸枝「いってましたっけ？」
鈴ヶ森「今、目の前にあるものに一生懸命生きれば意味なんて探す必要はないってことですかね」

幸枝「はい！」
荒尾「好きだ！」
幸枝「こっちみないで」
きん「恋は盲目なんですよ」
喜重郎「くそ！」
幸枝「それでは失礼します」
うめ「失礼いたします」

幸枝とうめが上手に退場。

喜重郎「嘘だろ」
荒尾「本当だ」
喜重郎「納得いかねぇ！」
荒尾「そうだな」
夏子「よかったですね」
きん「ねぇ」
荒尾「ありがとう！そうだ、鈴ヶ森君」
鈴ヶ森「はい」
荒尾「君の金毛九尾の呪いの解き方はわかったのかい？」
鈴ヶ森「それが全くです」
荒尾「そうか。軍で協力できることがあればなんでも言ってくれ」
鈴ヶ森「はい」
荒尾「では、失礼する！幸枝さーん」

荒尾が上手に退場。

喜重郎「今日はもう帰る！」
鈴ヶ森「おつかれ！」
喜重郎「引き止めろよ」
鈴ヶ森「めんどくさいなぁ」
喜重郎「俺はめんどくさくない！そして、恋がしたい！」
鈴ヶ森「勝手にすればいいでしょ。な、夏子」
夏子「え！う、うん」
きん「では、私もこれで」
夏子「はい。また来てくださいね」
きん「はい。ほら、帰りますよ」
喜重郎「また、明日くる！」
鈴ヶ森「来なくていいよ～」

喜重郎が上手に退場。

鈴ヶ森「まったく・・・」
夏子「幸枝さん、幸せそうだったね」
鈴ヶ森「そうだな」
夏子「いいなぁ～」
鈴ヶ森「夏子・・・」
夏子「な、なに清ちゃん。急に改まって」
鈴ヶ森「俺さ・・・」
夏子「う、うん」

鈴ヶ森が夏子の肩に手を置く。

夏子「え？え？清ちゃん？」

鈴ヶ森のお腹の音が鳴る。

夏子「は？」
鈴ヶ森「腹減って死にそうだよ～」
夏子「期待させといて・・・」
鈴ヶ森「期待？なにを？」
夏子「もういい！」
鈴ヶ森「何を期待したんだよ！」
夏子「うるさい！」

二人がはしゃいでいる中溶暗。

END

上演に関するお問い合わせは shigendou@gmail.com までご連絡ください。